

A Cognitive Semantic Analysis of English Adjectives

— 英語形容詞の認知意味論的分析 —

日 景 由 貴

1. 序論

同じ外界の状況に接しても，人により，時により認知のしかたが異なると，それを言語表現に移す場合，当然異なった表現となり得る。そして，多義語に含まれるいくつかの語義の意味関係はじつにさまざまであり，その分岐のしかたも多義語によりさまざまである。この語義の多義的な分岐もそれぞれにある心理的働きの一面を示すものと考えられ，比喩などの転義のうらにひそむ人間心理を問題にしなければならなくなる。そして，人間が外界の動き，形，位置関係などをどのようにとらえているかという認知のしかたにも考えが及んでいく。

たとえば thick は， a thick plate (厚い皿) だけでなく， thick fog (濃い霧) のように使われ，また， He is a bit thick. (彼は，すこし物わかりが悪い) のように比喩的な意味にもなる。語は用いられるたびごとに，少しずつ異なった意味を帯びている。このような語の多義構造の関係を人間は，どのようにとらえ，認知しているのか。今回，英語形容詞の多義構造を認知と関連づけて分析し体系的に示そうというのが本稿の目的である。また，本稿で使用する辞書名，CD-ROM には略号を用いるが，略号解は論文の末尾に示す。

2. 多義性をめぐって

従来，「1つの語には1つの意味」というテーゼを支持できるかどうか

論争の的であったと言えよう。そして、多義をどう構造化するかは以前から意味論の重大な課題であった。英英辞書 (OED) で “polysemy” を引くと、“The fact of having several meanings; the possession of multiple meanings” と定義されている。これによると、多義語とは、複数の意味を持った語ということになる。また、国広 (1982: 97) によると、「『多義語』とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う」と定義している。このように多義語を「意味的に関連のある複数の語義を有する語」と定義する立場が一般的に受け入れられると、「意味的関連性」をどのようにとらえればよいかという問題がでてくる。

そこで国広 (1994) では、上の定義をさらに次のように発展させている。

「『意味』という語自体はなほだ多義であり、その使用には十分注意しなければならないのであるが、従来もここでも『概念』にほぼ当たる意味で用いている。そうすると、一般に多義として扱われている意味の中には、概念的意味の観点からするとまったく関連のないものが含まれていることに気付く。」

そして、同一の現象を違った角度から捉えることによって、違った意味が生じることを示す例として、日本語の動詞「取る」をあげている。

(1) 私は一番大きいのを取った。〈獲得〉

(2) 庭の雑草を取った。〈除去〉

(1) と (2) のように、この主な意味である〈獲得する〉と〈除去する〉の間には、意味的には何の関連性もなく、むしろ反対の関係にある、共通点といえば、ある物を手でとらえ、その存在場所から引き離すという手の動作そのものである、と指摘している。そして、その引き離す動作は手にした物が価値あるものならば〈獲得〉、無価値なものならば〈除去〉と認知され、その認知の仕方は相対的である。つまり、同一の手の動作を解釈者が心理的にどのように捉えるかによって異なった概念的把握をしているのである。「多義語のあるものは、語の指示物である外界の現象そのものを基礎としてその多義を考えなければならない」、そしてそう考えることによって多義の記述が無理のない自然なものになると指摘している。さらに、「このような

考え方は、我々が外界を心理的にどのように捉えるか、どのように認知するかということを中心においているので、そうして生じた多義を他の場合と区別して『認知的多義』(cognitive polysemy)」と呼んでいる。つまり、語義の多義的な分岐の解明は、認知を視野にいれてはじめて十分になされるのである。

3. 現象素について

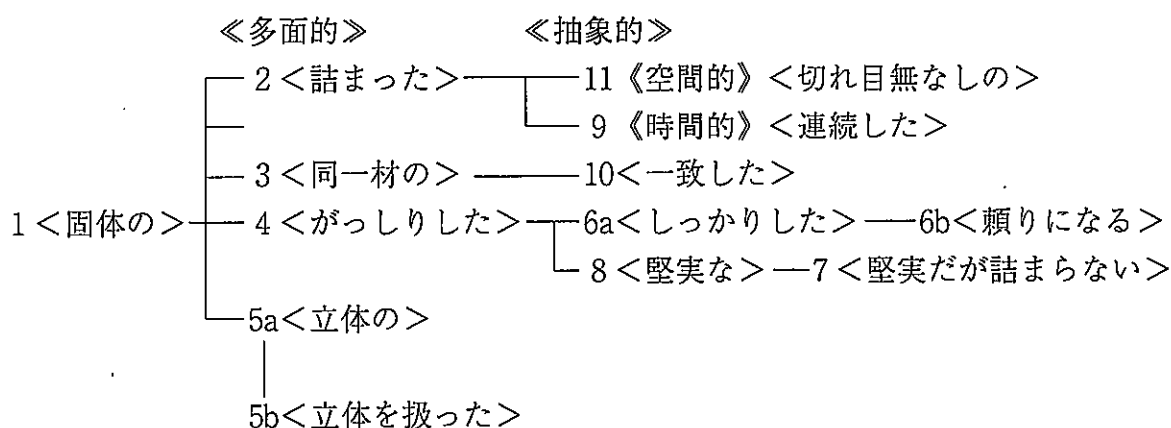
前節で、「多義語のあるものは、語の指示物である外界の現象そのものを基礎としてその多義を考えなければならない」とあったが、さらに国広(1994)では、認知的多義の場合、語が指すものとして、語義以前に外界の現象があり、その外界の現象を、人間が注意の範囲を変えたり、心的な視点の位置を変えて捉えた結果、いくつかの異なった意味が生じる、としている。そして、この語が指す外界の現象(人・物も含む)を「現象素」と名づけている。「これは、実質的には従来、用いられてきた『指示物』(referent)に相当するものであるが、同じではない。指示物は言語とは関係のない外界の存在物と考えられていたのに対して、現象素は言語の用法から帰納された、言語と関連を持った外界の一部と捉えられるものである」と付け加えている。たとえば、上述の日本語の動詞「取る」の現象素は、「人間が何かつかみ、取り上げる動作」である。この「現象素」を考慮に入れることによって、多義がうまく関連付けられる具体例として日本語の動詞「振る」「ほる」(国広(1997))、英語の‘over’ (国広(1982))などがある。

さらに、国広哲弥教授の神奈川大学における英語学概論の授業(1993)では、英語の形容詞‘solid’を取り上げ、その時、使用された資料に‘solid’の多義構造を次のように体系的に示している。そこでは、まず、英英辞書(POD 第8版)での‘solid’の定義を示している。

- (1) firm and stable in shape; not liquid or fluid.
- (2) of such material throughout, not hollow.
- (3) of the same substance throughout (*solid silver*).
- (4) sturdily built; not flimsy or slender.

- (5) a three-dimensional.
b of solids (*solid geometry*).
- (6) a sound, reliable (*solid argument*).
b dependable (*solid friend*).
- (7) sound but unexciting (*solid piece of work*).
- (8) financially sound.
- (9) uninterrupted (*four solid hours*).
- (10) unanimous, undivided.
- (11) (of printing) without spaces.

そして、以上のような語義を次のように、簡潔に体系化している。



ここでは、1 <固体の>の意味が中心にあり、「石のような固体」が現象素にあたる。そして、国広 (1989) では、このような多義を「多面的多義」と呼んでいる。つまり、その他の意味は「石のような固体」という同一の物について、場面に応じてある一面だけに注意を向ける結果生じるものである。そして、一面に注意が向けられながらも、ほかの面は背景でその一面を支えているという形になっている。「自然の状態で存在する石、木、金属などの物質は「固い」つまり「固体」であり、それは中まで詰まっているのが普通であり、しかもそれは同じ材質でできており、また同時に立体と見ることもできる」のである。

多くの研究者が、動詞・名詞・前置詞の多義分析を行っているが、以上の

ような先行研究，特にこの形容詞の多義分析は，たいへん示唆に富んだ研究である。以下では，これらの先行研究をもとに多義語の分析を試みる。

4. 英語形容詞 ‘thick’ の多義性

4.1. 辞書の定義

英英辞書 (SOD) をもとに，形容詞 ‘thick’ の意味記述を示し，各定義の末尾にその内容を簡略にして日本語にしたものを示す。各定義についている最初の数字は，辞書のものとは異なる。

THICK :

- I. 1a. of relatively great or specified extent or depth between opposite surfaces or sides. <厚い>
- 1b. of large diameter. <太い>
- 1c. made of thick material <厚いものでできた>
- 1d. (of a person or animal) thickset, stout. <がっしりした，しっかりとした>
- II. 2. densely filled or covered, having a high density of constituent parts. <濃い>
3. numerous, abundant. <多量の>
4. occurring repeatedly in quick succession; frequent.
<ひっきりなしの，連続した>
5. dense, presenting a hindrance to vision,
<曇った，どんよりした>
(of weather etc.) characterized by mist or haze, cloudy, foggy, misty.
(of darkness) impenetrable by sight.
- III. 6a. (of voice) hoarse, husky, indistinct, throaty.
<かすれた，しわがれた>
- 6b. (of an accent) marked, exaggerated.
<(言葉のなまりなどの程度が) ひどい，強い>

7. (of a person, of a person's wits or actions) slow, characterized by slowness of understanding, stupid, obtuse.

<(頭が)鈍い, 愚鈍な>

8. close in association, intimate, very friendly. <親密な>

Iは次元 (dimension) 的な空間的広がりを表わし, IIは密度 (density) に関する濃さを表わす。そして, IIIにはその他の意味が含まれるのだが, 日本語との対応を見ると, このような多岐にわたる多義語を, 認知的な観点をとらず概念的意味のレベルにとどまる限り, 適切に分析することは難しい。国広(1982:252)では, 幾何学の証明で, 補助線を用いると作業が明確かつ説得的に進められる例として「三角形の内角の和は2直角である」ことを証明する補助線を取り上げている。そして, この補助線に似たものを意味分析でも試みることができるという。つまり, 「分析対象の語のみを見つめないで, 視点を他に転換してみる」ということが大切である。では, ‘thick’ の場合, 多岐にわたる語義を説明するのに有効な補助線は何であろうか。

‘thick’ の場合, 「厚い」「太い」といった空間的広がりを表わす意味と, 「濃い」「密な」といった密度の高さを表わす意味が主な意味といえる。しかし, 空間的な広がりと密度の高さという, ふたつの意味の間には概念的には何の関連性もない。そこで, ‘thick’ がどのような名詞と結びつくか (collocation) を見ていくと, 1つの共通性が見えてくる。それは, 「重さ」である。確かに, 密度の高いものは重く, 厚いもの・太いものも重い。たとえば, ‘a large book’ ⇔ ‘a small book’ と ‘a thick book’ ⇔ ‘a thin book’ という2つの反義関係を比べると, ‘a small book’ の縦の長さ, 横の長さ, または厚さをのばせば ‘a large book’ になるのに対し, ‘a thin book’ は厚さのみ, つまりページ数を増やせば ‘a thick book’ になる。つまり, largeの方が空間的 (spacial) に占める面積が大きいことを表わすのに対し, thickはページ数(厚さ)が多くなる, つまり量的, 重量的に大きいことを表わすような感じがする。そこで, ‘thick’ の現象素を「重いもの」とするとどうであろうか。そうすることにより, ‘thick’ のさまざまな語義がうまく関連付けられ, その多くが「重さ」を表わす ‘heavy’ と入れかえられる

ことを、以下に用例を通して示していく。

4.2. 次元的広がりに関する意味

‘thick’ の 1a. の意は、日本語で「厚い」に相当し、紙、板、本などのような物体の有する大きい平面に対して垂直に切った切り口の幅の大小について言う。そして、1b. は「太い」にあたり、ひも、鉛筆、柱などのような長さの長いものの、長さに対して直角に切った切り口の面積の大小について言う。一見、何も関連のなさそうな「厚さ」と「太さ」だが、この2つには共通点があり、互いに関連しあい、体系的に示すことができるのである。

国広 (1982) では、日本語の次元 (dimension) 形容詞の意義素分析を行っており、それらを体系的に組み立てている。その中で「アツイ⇔ウスイ」「フトイ⇔ホソイ」も扱っているので以下に示す。

アツイ (ウスイ) の意義素は、図1に基づいて次のように記述してある。

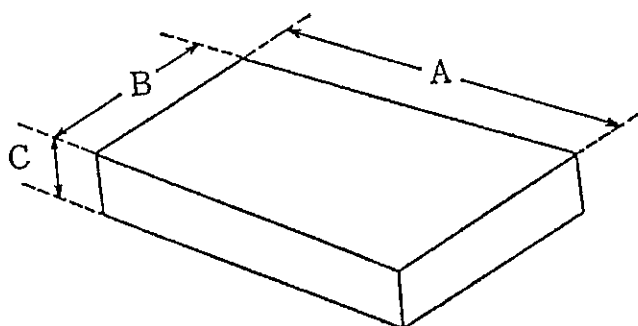


図1

アツイ (ウスイ) : < ‘A>B>C’ という長さの関係にある立方体において、ほかに限定的な条件がない時、C の値が標準値より大きい (小さい) >

また、フトイ (ホソイ) の意義素は次のように記述してある。

フトイ (ホソイ) : < 多少とも円形の断面を持ち、中心線が通っているように見える立方物の直径が標準値より大きい (小さい) > ただし < 長さは直径より大きい >

そして、続いて次のように2対の形容詞を体系化している。ある平面と直角の方向に広がりをつける(=肉付けをする)と板状の物ができ、それに言及するのが「アツイ⇔ウスイ」である。また、ある線を中心として周囲に広がりをつける(=肉付けをする)と棒状の物ができ、この棒状の物に言及するのが「フトイ⇔ホソイ」である。そして「フトイ⇔ホソイ」が言及する棒状の物をその中心線とは異なった方向に移動させると、その“軌跡”として、板状の物ができる。これに言及するのが「アツイ⇔ウスイ」である」と指摘している。このように、この2対の形容詞の間には<肉付けがある>という共通点があり、「アツイ」「フトイ」という2つの形容詞は互いに関連し合っているという。

‘thick’の辞書の定義の1a.では、次のような名詞に用いられる。

wall, bread, veneer, book, sheet, door, plywood, disk, sole, crust, headboard, leaves, film, skin, spectacles, glass, lens, insulation,

- (1) ... during its sixth year, it often proves fruitless until the seventh, when it starts to produce the **thick-skinned**, pear-shaped green fruits.

(COBUILD-CD ROM)

(1)の例では、「果物の皮」について述べられていて、文字通りに「厚い皮」を意味する。しかし、これが(2)のように人間に用いられると、比喩的な意味になり、「図太い神経」といった意を表わす。

- (2) I don't think he realized we were laughing at him. He was a bit **thick-skinned**, like that.

(COBUILD-CD ROM)

日本語でも、「面の皮が厚い」などと似たような表現が、「ずうずうしい、恥知らずであつかましい」といった意味で慣用句的に用いられている。

辞書の定義の1c.も、日本語では「厚い」に相当するだろう。そして、次のような名詞とともに用いられる。

carpet, tablecloth, blanket, matting, mat, robe, mantle, coat,

sweater, stocking, socks, jersey, cardigan, trousers, breeches,
(3) He was wearing the white, **thick** rollneck sweater and jeans.

(COBUILD-CD ROM)

この場合、「厚い布地，生地で作られた」という意味になる。そして、この意味で ‘heavy’ を用いることもできる。つまり、厚いコートやマットは糸や繊維の密度が高く、重いということである。

(4) Yet 20 protesters, dressed in **heavy** coats and warm gloves, picketed in front of a busy office building on East Main Street in Huntington.

(NYT, Jan. 3, 1993, p.4)

辞書の定義の1b. は、日本語で「太い」にあたり、次のような名詞とともに用いられる。

wood, branch, bar, stalk, grip, tail, asparagus, wire, cord,
rope, cable,

そして ‘thick’ は、line にも用いることができる。

(5) They will gloss their colorless lips and paint a **thick**, black line above their false eyelashes.

(COBUILD-CD ROM)

日本語でも、平面上に描かれた線について「フトイ(ホソイ)」を用いるが、これについて国広(1982)では「これは棒などの場合の立体性は捨象され、目に映る形のみを問題にするという形で線を見ているのだ」という。英語の ‘a thick line’ にもこの説明があてはまるのではないか。また、この意でも物理的な重さより、形状的な大きさが表わされ ‘heavy’ を用いることができる。また、むしろ ‘a thick line’ <太い線> (‘a thick line’ <細い線>) よりも ‘a heavy line’ <太い線> (‘a fine line’ <細い線>) の方が口語的であるという。(服部(1968))

(6) He drew a **heavy** line under the word. (『英語形容詞辞典』)

「彼はその語の下に太い線を引いた。」

1b. の意で neck, ankle, arm, finger, waist, wrist といった身体部位にも用いられる。

(7) He was sitting up in bed now, punching the air with his **thick** forearms.

(COBUILD-CD ROM)

また, nail や eyelid といった身体部位は, 1a. の「厚い」が用いられるだろう。用例の中には, 「厚い」ととらえてよいのか「太い」ととらえてよいのか, わかりにくいものもある。

(8) His sarcasm was followed by a stupid grin of his **thick** mouth and bad teeth.

(COBUILD-CD ROM)

(8) の ‘mouth’ は唇をさし, 日本語では「厚い唇」となる。

(9) His hair was thick and dark and he had **thick** dark eyebrows ruled almost straight across his face, above oddly staring dark eyes.

(COBUILD-CD ROM)

(9) は密度とも関連するが, 日本語では「濃いまゆ」「太いまゆ」と言えるが, 「厚いまゆ」と言うことはできない。身体部位の場合, 各部位をどのようにとらえているかによって「厚い」なのか「太い」なのか異なる。たとえば, 胸は「厚い」だが, 胴は「太い」である。また, 英語と日本語の身体部位の語彙構造を比較すると, その間には微妙なずれが生じるのだが (国広 (1990: 39)), ‘thick’ が身体部位とともに用いられると「厚い」「太い」とともに「がっしりとした」「たくましい」といった意が含まれるような感じがする。また, ‘heavy’ も似たような意味で身体部位に用いられることができる。

(10) Then he looked at his finger, at the wrinkled, **heavy** knuckle and the thick nail he used like a knife to pry up, slit, and open.

(COBUILD-CD ROM)

体格を表わす言葉に ‘thickset’ があり, これも 1d. の「がっしりした」

「たくましい」といった意にあたる。そして、これに似た意味を持つ単語に ‘heavysset’ があり、以下のように用いられる。

(11) Bev's father, Richard, a sturdy, solid country man, **thickset** with green eyes and coarse hands, has always lived in the village.

(COBUILD-CD ROM)

(12) Bert was known as a muscleman. He was a **heavysset**, round-faced, deceptively soft-looking young man who specialized in strong arm routines and ‘shakes’. [W. Burroughs Junkie (1972)] (OED2)

ここまでは、次元的広がりに関する意味について見てきたが、多くのところで ‘heavy’ と入れ換えられることかできた。これは、‘thick’ が「重さ」(heaviness) と関連深いためであると言えるだろう。次に密度に関する意味とその他の意味を見ていく。

4.3. 密度に関する意味とその他の意味

ここでは、‘thick’ によって、ある空間における物質の密度の高さに関する意味（辞書の定義の2.）が表わされ、あるものを全体として見た時に、その構成素の1つ1つが密に存在し、ぎっしりつまった状態を表わす。そして、次のように用いられる。

(13) With an annoyed gesture, he ran fingers through **thick**, sandy-colored hair. (COBUILD-CD ROM)

(14) It disappeared behind a **thick** growth of dark green vegetation on the Hunegger side, and on the other it wandered quietly off in...

(COBUILD-CD ROM)

4.2. の身体部位に関する意味のところでも言及したが、「濃い」という密度に関する意味と、次元的広がりに関する「太い」という意味が、互いに関連しあっていることを示す例がある。

(15) She was wearing her dark hair in two, **thick** braids to attain an

“American Girl” effect she thought was appropriate to Halloween.

(COBUILD-CD ROM)

(13) のような髪の毛の量が多い ‘thick hair’ (濃い髪) でみつ編みをする
と、(15) のような ‘thick blairs’ (太いおさげ) ができるというわけである。
日本語の「濃い」は、色にも用いられるが、英語では ‘thick’ を用いるこ
とはできなく、(14) のように ‘dark’ または ‘deep’ が用いられる。^(註1)

(16) One hundred and twenty acres of **thick** green countryside, spot of nice
fishing, no inquisitive neighbors, which makes security...

(COBUILD-CD ROM)

(16) の ‘thick green’ は、色の濃さについて言っているのではない。(14)
は、木や草などの植物が密に生い茂り、うっそうとしている様子を表わして
いるのだが、同様な様子を ‘green’ を用いて ‘thick green’ としているの
である。そして、こういった ‘thick’ の密度に関する意味も ‘heavy’ を用
いて表わすことができる。

(17) One of America's leading poets, he did a participatory stint with the
Pittsburgh Pirates (wearing a **heavy** beard that made him look a member
of the famous House of David baseball team),...

(NYT, May 31, 1992, p.16)

(18) South of San Salvador de Jujuy, the road winds through a mountain
cloud forest,
a surprise coming from the altiplano, with lush jungle growth and
tropical birds. For all the beauty, with the winding and **heavy** growth
this is not a drive to be taken after dark.

(NYT, Jan. 31, 1993, p.23)

‘thick’ が液体に用いられると、ある液体に含まれる物質の密度が高い
状態を表わす。

- (19) Ten minutes before serving, add the sage and pepper. If the soup becomes too **thick**, add more water. (COBUILD-CD ROM)

この例は、料理の作り方を指示していて、「スープが濃すぎた場合、水を加えなさい。」というように、‘thick’には日本語で「濃い」が対応するが、何を指して「濃い」といっているのだろうか。ここでは、味が「濃い」ことをいっているのではなく^(註2)、液体中に含まれている固体の量が多く、密度が高い状態を指す。つまり、水っぽくなく、どろどろした状態のことをいう。たしかに、水分が蒸発して液体中の味のもととなる成分の占める割合が多くなると、味は濃くなるのだが、その液体の状態がさらっとしては‘thick’とは言わない。この場合、液体中に含まれる物質が多いために密度が高くなり、どろっとした、重量的なものを感じさせるのである。この意では、他に次のような名詞とともに用いられる。

syrup, sauce, treacle, jam, paste, clam chowder, cream, oil, gel, grease, mascara, mud, hot chocolate,

日本語の「濃いコーヒー」は、英語では普通 ‘strong coffee’ という。これは、カフェインなどの含有量が多く、刺激性が強いということになる。

- (20) Breakfasts were the French standard — a basket of bread, butter, jam and **strong** coffee — but dinners, served by… (NYT, Nov. 20, 1994, p.6)

‘thick coffee’ といった場合、カップの底に沈殿物がたまるようなどろっとしたコーヒー、たとえば Turkish coffee のようなものを指すであろう。

- (21) … and ordered a couple sandwiches and espresso from a woman named Hedvig-Hungarian espresso is **thick** and **strong**, just like their accent — I asked Hedvig if I could have a language lesson. (COBUILD-CD ROM)

そして、この ‘thick’ の「どろっとした」状態には範囲があるようである。

- (22) Whisk the double cream until **thick**, but not stiff. (COBUILD-CD ROM)

(22) は、クリームを ‘thick’ の状態まで泡立てるのだが、やりすぎて ‘stiff’ になってはいけないという。つまり、凝固してしまうほど固い状態は ‘thick’ とは言えなく、あくまでも「どろっとした」状態をさすようである。そして、(22) のような例は、料理の本などにひんばんに見られる。

(23) Cook, stirring constantly, until the liquid turns **thick** and sludgy (around 5 minutes). (COBUILD-CD ROM)

(24) Whisk the egg yolks with sugar until the mixture becomes **thick** and mousse - like. (COBUILD-CD ROM)

(25) Whisk the egg yolks and 75g of the caster sugar together in a bowl until very pale and **thick**. (COBUILD-CD ROM)

(23) は、「液体がどろっとするまで、常にかきまぜながら加熱しなさい。」という意で、たしかに水分を蒸発させて、液体の濃度が高い状態になる。

(24) は、「卵黄と砂糖をムースぐらいの固さになるまで、かきまぜなさい。」

(25) は「卵黄と75gのグラニュー糖をボールと一緒に入れ、白っぽく固くなるまでまぜなさい。」という意味になる。料理の本などを見ると、この ‘thick’ は日本語で「固い」に相当する。(24)(25)では、卵と砂糖を加熱することなく、ただかきまぜるだけで ‘thick’ の状態にする。つまり、まぜるだけなので密度は変化しないのだが、まぜることにより材料の物理的な組成が変化して ‘thick’ の状態になるのである。このように液体の密度は高くなっていないのだが、物理的な組成の変化によって、密度が高くなったような固い状態も ‘thick’ を用いて表現できるのである。

こういった液体がどろっとした状態を表わす意味は、‘heavy’ にもある。‘heavy’ が ‘soil’ ‘mud’ などと結びつくと、すきや足、車輪に土や泥などがくっつき重くなることから「歩きにくい」「ぬかるんだ」という意味になる。

(26) We had a difficult trip over **heavy** roads of mud and sand.

(『英語形容詞辞典』)

「私たちは泥や砂でぬかるんだ道路の上を苦労しながら歩いて行った。」

‘thick’ はまた、ある気体中において含まれる物質の量が多く、密度が高い状態を表わす。そして、次のように用いられる。

(27) In the morning the fog was still **thick** so that to go the village I crept along with my headlights full on. (COBUILD-CD ROM)

(28) The only evidence of occupation came from the chimney, which was belching out **thick** smoke. (COBUILD-CD ROM)

(27) は、霧が ‘thick’ (濃い) である状態を表わしている。霧とは、空気中の水蒸気が凝結して細かい水滴となり、地表近くの大気中に煙のようになっている自然現象であり、大気中に含まれる水蒸気の量が多くなると ‘thick’ になるというわけである。(28) も同様に、煙の成分が多くなると ‘thick smoke’ になる。また、このような意でも、‘heavy’ を用いることができる。

(29) The plane was on a flight from Honolulu to Auckland. It was unable to land because of **heavy** fog and flew on toward Christchurch. (COBUILD-CD ROM)

‘thick’ はまた、‘cloud’ (雲) にも用いることができる。

(30) **Thick** dark clouds are generally hovering overhead. (NYT, Mar. 16, 1992, p.7)

雲は、大気中の水蒸気が冷却、凝固し、微細な水滴や氷片の大集団になって空中に浮遊しているものをさす。つまり、空中に浮遊している水滴や氷片の量が多くなり、密度が高くなると、その雲は ‘thick’ になる。日本語では、これを「濃い雲」とは言わず、「大きな雲」「厚い雲」と言うが、これは雲の形に注目しているのだろう。また、この用法にも ‘heavy’ を用いることができる。

(31) It was one of those gloomy days, with a sky bloated with **heavy** clouds and air that might have been comfortable to a raw clam sitting on ice...

(NYT, Dec. 18, 1994, p.76)

ある空間において、含まれる物質の密度が高いということは、その構成素の量が多いため密度が高くなる。(13)は、頭皮において密に髪の毛が生えているので、ふさふさと髪の毛の量が多く、豊かな状態を表わす。また(14)は、ある空間において、植物が密に生えて、うっそうと生い茂っている様子を表わして、この場合もたしかに、木や草の量が多い。液体や気体においても同様で、ある液体や気体に含まれる物質の量が多くなると、その密度は高くなる。こういった密度が高いことから、3. numerous, abundant, <多量の>の意味が派生していると思われる。‘thick on the ground’が3.の意で、成句として口語的に用いられる。

(32) Christopher, who had now completed his studies, found that jobs in Animal Nutrition weren't exactly **thick on the ground**.

(『英語形容詞辞典』)

「クリストファーはやっと研究を完成させたのに、動物栄養学の分野での仕事の口はあまり多くないことがわかった。」

ある空間に含まれる物質の量の多さと密度の高さに関連の深い用法として4. occurring repeatedly in quick succession; frequent. <ひっきりなしの、連続した>がある。そして、次のように用いられる。

(33) a **thick** rain of blows 「連打の雨」 (『英語形容詞辞典』)

(33)は、ひっきりなしに多量の雨が降っている様子を表わしている。人間の注意力は普通、動くもの、変化するもの、まとまった形を持ったものに向けられるが、‘rain’の場合には、まず空から降ってくる雨滴に向けられる。その次に、雨の降る空間、時間帯に向けられる。ある空間において、雨滴と雨滴の間隔が密に降ると、たしかにその空間における雨滴の密度は高くなり、雨の量も多くなる。そのように雨が降っている状態を角度を変えて見ると、「連続した」といったの時間的な意味が出てくるのである。

(Cf. After **heavy** overnight rain over the last two days the course is now waterlogged.)

また、次のようにも用いられる。

(34) The bank behind me was **thick** with oak trees, and acorns lay in the slack water like so many polished river stones. (NYT, Dec. 18, 1994, p.9)

(35) The halls of Bosnia's Presidency building were **thick** with rumors last week that Washington had withdrawn support for the peace plan drafted by five countries known as the contact group. (NYT, Dec. 4, 1994, p.52)

(36) The air of Jilib is **thick** with a low buzzing. It sounds like flies, but is the slow dirges for the dying. (COBUILD-CD ROM)

これらはすべて、‘S be thick with ~’ という形で<S (物・場所) が ~ (物など) でいっぱいである (満ちている)> という意味になる。(34) は、川岸にオークの木がたくさん植わっている様子を表わし、ある空間において物質がぎっしりとつまっている様子、つまり密度が高い様子を表わしている。では、(35) (36) はどうだろうか。(35) は、建物のロビーのあちらこちらで、人々がそのうわさをしているという意味で、(36) は、低い声がその場所に響きわたっている様子を表わしている。これは、rumor や buzzing がある空間中に広がって、満たしてあたたかさも密度が高いように表わされている比喩的な表現である。また、この用法にも ‘heavy’ を用いることができ、‘S be heavy with ~’ で<S が~でいっぱいである> という意味になる。たしかに、ある空間が物でぎっしりと満たされると、密度が高くなると同時に重くなるのである。

(37) The trees are **heavy** with apples. (『英語形容詞辞典』)

「木にはリンゴがたわわになっている。」

(38) The classroom was **heavy** with undispeled tension.

(『英語形容詞辞典』)

「教室にはいまだにほぐれない緊張感がみなぎっていた。」

また, ‘S be thick with ~’ の形で次のようにも用いられる。

(39) Jane is very **thick** with Marry now. (『英語形容詞辞典』)

「ジェーンは今メリーととても仲がよい。」

この場合, ‘S be thick with ~’ で口語的に< S (人) が ~ (人) と親しい (仲がよい)> という意味になり, 8. の意にあたる。いままでの意味では, 限定用法, 叙述用法がいずれも可能であったが, この「親しい」の意では, 叙述的に用いられるだけである。

(40) It was early May and the sun was **thick** and warm.

「五月初めで日差しが強く, 暖かった。」

Robert B. Parker, *Early Autumn*, p.101)

(41) After only a few yards I was enveloped in **thick** silence, where the only sound was the ringing in my ears and my breathing.

(NYT, Jan. 31, 1993, p.8)

(40) は日本語で「日差しが強い」となっているが, この ‘thick’ も同様に, ある空間における太陽の光の量が多いため, 「日差しが強く」感じるのだろう。(41) の用例は, (35) (36) とは全く反対の状態を表わしている。(35) (36) は, ある空間中で音 (rumor, buzzing) が聞こえることを, あたかもその空間を音という成分で満たしているように表現されている。一方, (41) は全く音がない状態を ‘thick’ を用いて表わしているが, これも, 空間を ‘silence’ という成分が満たしているように考えられる。

今までは, ある空間 (気体・液体も含む) の中に含まれている成分が多いため, その空間がその成分によって, すきまなく埋められている様子を ‘thick’ を用いて表わしたが, (42) (43) のそれぞれの例は, 何をもって ‘thick’ といっているのだろうか。

(42) The sky was low and **thick** like cotton, and while she stood on the porch it began to snow, heavily, in fat wet drifting flakes.

(NYT, Dec. 25, 1994, p.9)

(43) The air was so **thick** we could scarcely breathe. (『英語形容詞辞典』)

「あたりの空気がとてもよどんでいたのので息ができないほどだった。」

(42) は、空が低く、綿のように ‘thick’ であるという様子を表わしている。つまり、空が、いっぱい雲など (‘thick clouds’) で、覆われて不明瞭な状態を表わし、日本語では「どんよりとした」「曇った」が対応するだろう。また、(43) のように、空気が ‘thick’ であるということは、どういうことだろうか。日本語では、「空気がよどんでいる」という訳が対応している。たしかに、空気中を霧や煙あるいは悪臭などが満たしていれば、あたりはどんよりと濁って、不明瞭な状態となり、見通しが悪くなる。つまり、(42) (43) の意味は、辞書の定義の 5. に該当するが、この意はある空間における物質の密度の高さを表わす意味と関連深く、はっきりと区別しにくい所もある。また、この意でも、‘heavy’ が以下のように用いることができる。

(44) The sky was **heavy** just before the rain. (『英語形容詞辞典』)

「雨の降りだす前は、空はどんよりと曇っていた。」

このように ‘heavy’ を用いて、雲が空一面に重々しく広がっている様子を表わすことができるのである。

‘thick’ によって、比喩的に「見通しのきかない」状態を表わし、ある空間における不明瞭さ、不鮮明さを示したが、人の声や音にも言及することがある。

(45) His voice sounded **thick** because of his cold. (『英語形容詞辞典』)

「彼は風邪をひいて声がしゃがれていた。」

(46) ‘You heard what I said?’ he asks. ‘Yes.’ I wait another moment. Then : ‘How long,’ I ask, ‘can I expect my wife…?’ Clumsy words, **thick** articulation, my voice hoarse, my heart racing in panic.

(NYT, Dec. 4, 1994, p.84)

(47) On Thursday, Mr. Sharp demonstrated that he is no mere dabbler : his vast array of compositions were all unified by a **thick**, chunky sound and

sharp, pointillistic playing.

(NYT, Dec. 29, 1994, p.17)

人の声や音に言及する場合, 'thick' の辞書の定義によると 6a. の意味にあたる。辞書の定義を日本語に直すと「かすれた, しわがれた, はっきりしない」といった不明瞭さを表わす意味が対応するが, 実際にはどのように用いられているだろうか。(45)(46) の 'thick' には, 6a. のような不明瞭さを表わす意味が対応する。しかし, (47) の 'thick' は 'chunky' とともに「ずっしりとした低い」音を表わす。このように文脈によって, 意味が異ってくる。また, 'thick' の反義語である 'thin' が音や声について言及すると, 次のように用いられる。

(48) The sound was too **thin**. (『英語形容詞辞典』)

「その音はあまりにも小さくてよく聞こえなかった。」

(49) a singer having **thin** high notes (『英語形容詞辞典』)

「細くてかん高い声で歌う歌手」

この場合の 'thin' の意味は「(音や声が) か細い」となり, 力が弱く, 音量的に少ない音声のことを表わす。一方, 'thick' は (45)(46) が「しわがれた, はっきりしない」といった不明瞭さを表わすからといって, 音量的に少ないことを表わしているのではない。むしろ, ずっしりと重量感のある低い音を連想させる。たしかに「しゃがれた」声は, 風邪をひいていない普段の声よりも低くなるだろうし, かん高い声より低い声の方が「はっきりしない」と感じるだろう。また, 'thin' は (49) のように 'high' と一緒に用いることができるが, これを 'thick' と入れ換えて用いることはできない。'thick' の現象素を「重いもの」と考えると, 「重いもの」はたしかに水の中などに入れると, 下へ下へと「低い」ところへと沈んで行く。こういったところからも, この 'thick' の意がでてくるのではないか。また, 日本語でも, 「太い」声(「細い」声)ということが出来るが, たしかに「太い」声は低音である。また, 声帯が「厚い」と声は低くなる。

さらに, 次のようにも用いられる。

- (50) 'We've lost everything anyway,' said one, Clive J. Doyle, a 53-year-old American citizen who still speaks with the **thick** accent of his native Australia. (NYT, Feb. 27, 1994, p.1)

この 'thick' は、辞書の定義の6b.<(言葉のなまりなどの程度が) ひどい, 強い>という意になる。一見、現象素である「重さ」とは何の関連もないように見えるが、この「なまりがひどい」という意は、程度の重さを表わし 'heavy' を用いても表わすことができるのである。

- (51) They made an odd couple, since Mr. Sanchez de Lozada is not only a multimillionaire mining entrepreneur, but was raised in the United States and speaks Spanish with a **heavy** accent.

(NYT, Sep. 19, 1993, p.9)

一見、全く関連のないように見える語義でも、'thick' の現象素を「重いもの」と考えると、うまく関連付けられる語義をもうひとつあげる。'thick' には、辞書の定義で7. の意もあり、日本語では「(頭が) 鈍い」に相当する。たしかに、重いものは動きが鈍くなり、そこから、いろいろなところの鈍さに言及している。

- (52) Fred Durkin is a big guy, thick at the waist, thick at the neck, and may be a little **thick** upstairs, too, although he's almost as good as Saul at tailing,...

(COBUILD-CD ROM)

- (53) Carlos had difficulty speaking. His tongue was **thick**.

(『英語形容詞辞典』)

「カルロス はしゃべるのに苦労した。舌がもつれたからだ。」

(52) には、'thick' が3つあり、最初と2番目の 'thick' は身体部位の「太さ」について言及しているが、3番目の 'thick' が「(人が) 頭が鈍い(悪い)」の意で用いられており、この意ではほかに、thick-head, thick-skulled, thick-witted などの言い方がある。(53) は、舌が 'thick' であるとし、舌

(口)の動きの鈍さから「ろれつが回らない, 舌がもつれている」の意になる。そして ‘heavy’ を用いて「鈍さ」を表わす用法もあり, 特に heavy-headed は同様に「頭の鈍さ」を表わす。

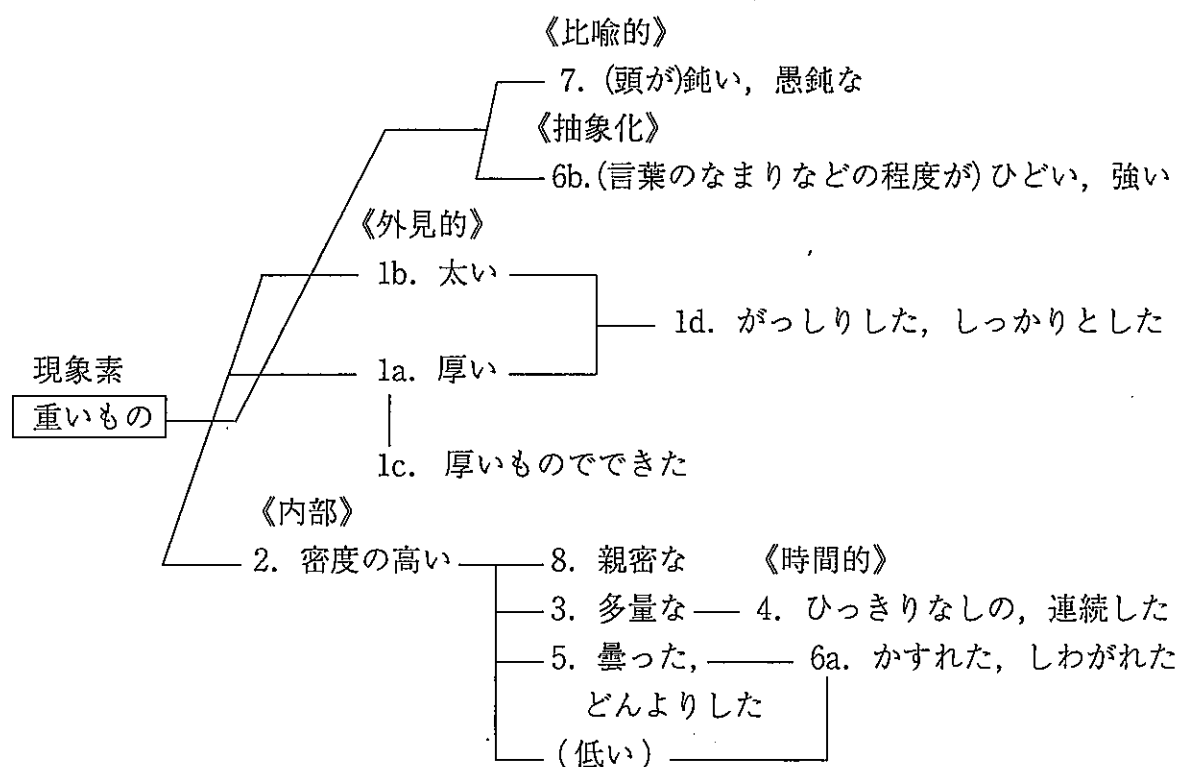
(54) The fat man tried to dance, but he was too **heavy-footed**.

(『英語形容詞辞典』)

「その太った人はなんとか踊ろうとしたが, 動きが鈍くてだめだった。」

5. ‘thick’ の意味派生

以上のように, 多岐にわたる ‘thick’ の意味と用法を見てきた。このような多義を適切に体系化するのが最後に残された問題である。4.1. で ‘thick’ の意味記述を SOD に基づいて示し, 各定義の末尾にその内容を簡略にして日本語で示したが, これを用いて, 「重いもの」を現象素として構造図を作ると, 以下のようなになる。



ある物が, 厚くなったり, 太くなるとたしかに重くなる。その「ある物」の表面的な形, 大きさのみに目を向けたのが, 1a. <厚い>と1b. <太い>で

ある。また、今度は「重いもの」の内部に目を向けると、2. <密度の高い>状態になっている。そして、8. <親密な>、3. <多量な>、5. <曇った、どんよりした>の3つの意が2. <密度の高い>から派生していると考えられる。ある空間において、物質の密度が高いと物質と物質の間隔は密になり、ここから8. <親密な>という意味がでてきたと思われる。物質と物質の間隔から、さらに視野を広げて見ると、その密度の高い空間に含まれている物質(構成素)の量は、多量であることがわかる。そして、さらに見方を変えると、その空間は曇って、どんよりして見える。これを、図で示すと次のようになる。

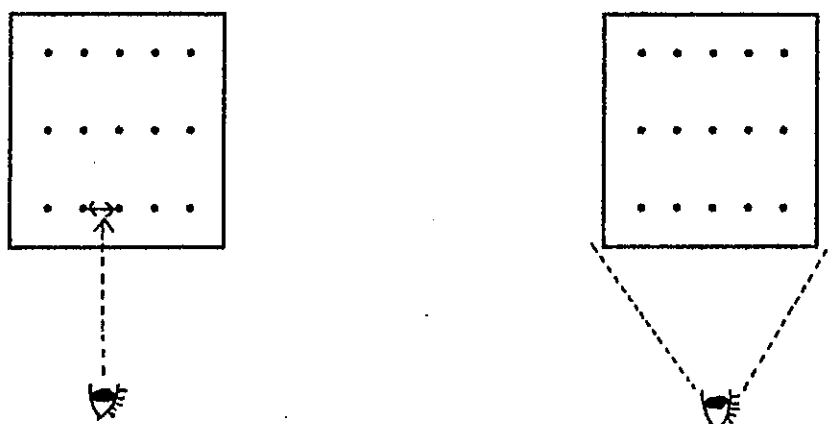


図 2

このように、同一の状況について言及しても、視点の置き方が異なると、違った意味が派生してくるのである。

また、「重いもの」は動きが鈍いという性質から、7. <(頭が)鈍い、愚鈍な>という意味がでてきたと思われる。人の声や音について言及する6a. <かすれた、しわがれた>の意味の位置は、あまりはっきりしていない。この意味は5. <曇った、どんよりした>という視覚的意味から聴覚的意味への比喩と考えられるが、「かすれた、しわがれた」声は音質的には低い。「重いもの」は密度が高く、水などに入れると<低い>ところへと沈むという性質とも関連があると考え、そちらにもつないでおいた。6b. <(言葉のなまりなどの程度が)ひどい、強い>という意味は、物理的な重さから抽象化されて、程度の重さを表わすようになったものである。この7.と6b.の意味は‘thick’

の派生的な意味と考へ、そのため構造図では他の意味と平面的に並べずに、レベルを変えて立体的に示した。

6. 結語

このように、‘thick’の現象素を「重いもの」ととらえ、その同一の現象素を違った角度から見ることによって、さまざまな多義は、関連付けられることができる。そして、認知を視野に入れることによって、多義を強引に単一の基本義にまとめようとする不自然な努力から解放され、分析に自然さと整合性を増すと考えるのである。

しかし一方で、‘thick’の現象素を「重いもの」とすることは、語が指す語義以前にある外界の現象である「現象素」には抽象的すぎる感じがする。また、‘thick’のさまざまな意味の大部分の用例が、重さを表わす‘heavy’と入れ換えることができ、‘thick’が「重さ」と関連深いことがわかった。しかし、この‘thick’の表す意味と‘heavy’の表す意味が全く同じかというところではなく、どう違うのかということ明確ではない。また形容詞‘thick’は、同じ形で副詞・名詞としても用いることができるが、今回は、形容詞としての用法のみを取り上げ、イディオムとしての用法もあまり扱わなかった。さらに多くの‘thick’の用法を考察し、こういった問題点をひとつひとつ解決していくことがこれからの課題である。

注釈

(注1) ‘thick’には、色の「濃さ」について言及する意味はないが、反義語である‘thin’は「(色が)薄い」といった意味で用いることができる。

(Most of flowers are delicate, with stems suspended in space amid thin color, often pale blue. (NYT, Mar. 29, 1991, p.19))

(注2) 反義語である‘thin’は、液体に用いられて「薄い、水っぽい」という意味になり、液体の濃度が低いことを表わすが、‘wine’とともに用いられると「こくのない」というように味についても言及することができる。

(Mr. Parker, who gave the same wine 67 points, wrote, ‘Here is another bitterly acidic, austere, lean, thin wine… no pleasure, no character, and no soul.’ (NYT, Jan. 9, 1991, p.5))

使用辞書略号

LDCE : Longman Dictionary of Contemporary English. Third Edition, Longman, 1995.

OED : The Oxford English Dictionary . Second Edition, Clarendon Press·Oxford, 1989.

SOD : The New Shorter Oxford English Dictionary. Second Edition, Clarendon Press Oxford, 1993.

POD : The Pocket Oxford Dictionary . Eighth Edition, Clarendon Press·Oxford, 1992.

英語形容詞辞典 : 『基本英語形容詞・副詞辞典』.小西友七編,研究社出版, 1989.

使用 CD ROM 略号

COBUILD-CD ROM : COLLINS COBUILD English Collocations on CD ROM.

NYT : The New York Times on CD ROM .

OED2 : Oxford English Dictionary 2nd Edition on CD ROM.

参考文献

国広哲弥(1982)『意味論の方法』,大修館書店.

———— (1985)「言語と概念」,『東京大学言語学論集 '85』,東京大学文学部言語学研究室.

———— (1989)「多義と認知」,『日本エドワード・サピア協会ニュースレター』第3号,大東文化大学平林研究室内.

———— 編(1990)『日英語比較講座第3巻 意味と語彙』,大修館書店.

———— (1994)「認知的多義論 — 現象素の提唱 —」,『言語研究』第106号,日本言語学会.

———— (1997)「文脈的多義と認知的多義」,『梅光女学院大学公開講座論集 第40集』笠間選書175,笠間書院.

宮崎清孝・上野直樹(1985)『認知科学選書1 視点』,東京大学出版会.

斎藤勇(1996)『イラストレート心理学入門』,誠信書房.

田中茂範(1992)「認知意味論的探求(1):一般化・典型化・差異化」,SFC Journal of Language and Communication. Vol.1.

Ullmann, S. (1962) Semantics : an introduction to the science of meaning, Oxford : Blackwell and Mott.

山口富士夫(1981)『コンピュータディスプレイによる図形処理工学』,日刊工業新聞社.